国際化の中での日本語教育 ②

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

日本語の必要性

日常生活で外国人に会うことは別に珍しいことでもなく、もはや当たり前のようになってきた。数年前、京都の宇治へ留学生たちと校外学習に出かけた時のことだが、伏見稲荷神社へ行くと日本語は聞こえず、外国語ばかり聞こえてくるような感じがした。留学生たちが「外国人が多いなあ」と感嘆しているのも微笑ましいが、聞こえてくる外国語が分かる留学生もいるから、どこから来ている人たちか聞いてみた。中国や韓国、東南アジアから来ている人も多かったが、欧米の人もいたようだ。彼らは旅行者なのだから、特に日本語を流暢に話す必要もない。旅行に必要な最低限の挨拶や会話で充分なのかもしれない。しかし、同じ外国人でも日本に住み、生活するとなると別である。日本語が話せなければ日本人とコミュニケーションを取ることができず、トラブルになったり、不利益を被ることもある。見た目が外国の人だと、何となく“よそ者”と感じ、話も通じないだろうと、できればかかわりたくない人もいるだろう。しかし、日本語で話しかけられコミュニケーションが取れるとわかったら、安心して笑顔に変わり、親切に対応するということも多いのではないだろうか。パリ赴任中、街を歩いていると道を聞かれたり、時間を聞かれたりすることがけっこうあった。筆者はアジア人であり、見た目でわかるのに、どうして外国人にフランス語で道を聞いたりするのかとも思ったが、パリの多様化した社会では、そんなことは関係ないようだ。やはりそこで暮らしていくにはコミュニケーション能力が必要だ。大阪や東京だけでなく、地方の都市でも道に迷っていたら、そこに住んでいる外国人が親切に日本語で教えてくれるかもしれない。もうすでにそんな時代に入っているのではないだろうか。

コミュニケーション能力

「コミュニケーション能力」というと、なにも外国語だけの話ではなく、日本人同士でも社会生活を営んでいく上で大事なものだと誰もが思っているところである。言語による意思疎通能力のことで、言葉だけでなく表情や身振りなど非言語的な要素も含め、お互いに理解しあい、信頼関係を築いていく能力であるとも言える。キャッチボールのようにうまく会話を続ける能力でもあるが、これらを円滑に行うことが出来る知識、技術（コミュニケーションスキル）がないと社会生活を営む上で問題が起こってくる。言語学の分野で著名な Canale と Swain は、コミュニケーション能力の要素として、**文法的能力** (Grammatical competence)、**談話能力** (Discourse competence)、**社会言語能力** (Sociolinguistic competence)、**方略的言語能力** (Strategic competence) の４つを挙げている。要約すれば、文法的に正しい文を使用し、複数の文で談話を構成し、まとまりのある話ができ、相手との社会的関係にも配慮しながら適切に言葉を使い、コミュニケーションがうまくいかない場合には、言い換えたり、繰り返したりして、会話を修復・継続していくなどの能力が必要だということである。これは第二言語として日本語を学んでいる人に限ったことではなく、ネイティブの日本人にも必要な能力であり、どれかが欠乏していても円滑なコミュニケーションが取れない。日本人なら自然に身に着いていると思われがちだが、談話能力や社会言語能力が劣っていると感じる若い人に会うことも多くなってきているようにも感じる。逆に文法的能力がやや劣ってはいるが、社会言語能力、談話能力、方略的言語能力が優れ、充分に日本人とコミュニケーションが取れる外国人も増えてきているように感じる。日本語がそれだけ国際化しているということだろうか。

ことばの役割

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、『思考と言語』（柴田義松訳、新読書社、21 頁）で、次のように述べている。

> ことばの最初の機能はコミュニケーションの機能である。ことばは何よりも社会的交流の手段であり、発話と理解の手段である。ことばのこの機能も要素に分解する分析においては、ふつう言葉の知的機能から切り離されてしまい、二つの機能は平行的に、相互に無関係に、ことばの属性とされた。ことばは、いわばコミュニケーションの機能と思考の機能とを兼任しているのである。

つまり、ことばというのは、人が生きていく上で不可欠のものであり、単にコミュニケーションの道具としての役割だけでなく、人がいろいろ考えるための基本的な役割も担っているのである。またことばはアイデンティティとも深く関わりのあるものであり、人格形成においても重要な役割を持っていると言える。普通、第二、第三言語として外国語を勉強し、コミュニケーションが取れるようになっても、独り言を言ったり、何か一人で考え事をしたり、計算などをする時には第一言語で思考するはずである。幼い頃に外国へ移住し、その国の国語教育を受けたケースや植民地政策により、その国の国語教育を受けたケースなど、世の中にはいろいろなケースがあると思うが、根本的に人が頭の中で考える時に使うのは第一言語である。筆者も今、原稿を日本語で考え、日本語で推敲しながら書いている。今、戦争もない平和な時代の日本で生活している。しかし、そのような暮らしに慣れた我々は、外国が攻めてきて、世界の地図から日本が消え、日本語を使うことを禁止され、攻めてきた国の言葉を強制的に習わされるというような想像をしたことがあるだろうか。自分の生活のために新しい言語を習いはしても、思考する時の言語は日本語で、子供たちは宗主国の教育によって親とは違う第一言語で思考するようになる。そして、ひらがな、カタカナ、漢字という三つも文字を覚えなければならない日本語は合理的ではないと言い出すかもしれない。日本語というのは繊細なことまで表せる世界的にも珍しい言語であり、日本の文化を支えてきた元であるとも言える。しかし、日本語の素晴らしさをいくら説明しても子供たちには受け入れてもらえないということも起こるかもしれない。

ここまで書きながら「日本語を話す日本人」というのは何者なのかという思いに駆られる。仮定の話はやめて、現実に戻るが、これから日本はさらに多様化していくように思われる。見た目で日本人だと判断するようなことはなくなる時代に入るのかもしれない。コミュニケーションを取るための言葉であり、思考する上での言葉として日本に住む人々に日本語はこれからも必要とされるであろう。“ことば”というものは本当に大事なものだとも感じる。